十字架

誠一

角川書店

白の十字架
森村誠一

昭和五十三年九月十日　初版発行
昭和五十四年十二月十日　四版発行
発行者　角川春樹
発行所　角川書店
東京都千代田区富士見二―十三
〈電〉〇三〈二六五〉七一一一大代表
〈振〉東京三―一九五二〇八〈郵〉一〇二
印刷・製本―大日本印刷株式会社

Printed in Japan　落丁・乱丁本はお取替えいたします
0093-872231-0946(0)

目

次

神の諾否……七
襲われた不倫……二九
アレルギー性不倫……五五
濆れたアルピニスト……七六
遺留された不達書……九三
アルジェンティーナの部屋……一四八
拒否されたアルジェンティーナ……一八四
出産された証拠……二〇〇
麓の痩せた豚……二四七
誘蝶燈……二六九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

分離された容疑者……二九八
水難の同窓会……三二一
卑下した倒錯……三四〇
穂高の誓い……三四八
殺人への案内状……三七五
岐路に立つ十字架……三九三
終りのない演奏……四二一
あとがき……四二五

イラストレイション　日暮修一

デザイン　鈴木邦治

白の十字架

神の諾否

1

上空の雲の流れが慌しくなった。間もなく〝定期便〟がやって来る前ぶれである。足下の氷河圏谷にガスが湧きはじめている。夕べの霧などという風流な点景ではなく、凶悪な殺気を孕んだ灰色の集塊である。山は急速に昼の束の間保っていた平衡を崩しかけていた。

山の機嫌の天秤は気まぐれである。いったん傾きかけると、世界は一変してしまう。紺碧の虚空に、躍動していた太陽は、たちまち白い悪魔の狂乱の中に呑み込まれてしまう。白魔の触手は、すぐそこまで忍び寄って来ている。急がなければならなかった。だがあとワンピッチ頑張る。高度はすでに六千メートルに達している。C3（第三キャンプ）から伸びきった固定ザイルの先端から開始されるルート工作は、時間的にかなり厳しい。午後は、定期便と呼んでいる風雪が、この壁全体を狂乱の宴の舞台にして独占してしまう。

その前に少しでも高度を稼いでおかなければならない。一寸刻みにのびるザイルは、交代の戦力と必要資材、食糧を輸送する兵站線となって、頂上に肉薄していくのだ。だが、そこまでは、あと一、九〇〇メートルの一歩一歩死を孕んでいる垂直の空間がある。

はたしてあの高みに立てるのか？　それは、いま考えるべき問題ではなかった。いまは一寸刻みのル

ート工作に全力を集めていればよい。彼らにはさらにC4の設営予定地を見つけるという大役がある。

「下りよう」

トップを進んでいた津雲が、ついに時間切れを宣した。腕時計は四時に近づいている。すでに白魔の触手は完全に二人をとらえていた。烈風が四方八方から吹き集まり、雪煙が数メートル後方にいるパートナーの姿を吹き消した。

津雲明広と高浜正一は、少し度を過ごしたのを悟った。彼らは、死の触手を振りきって全力でC3まで駆け下りなければならない。それは生死を賭けた競争である。

落石を混えたスノウシャワーが上部から狙い射ちをしてくる。それを避ける方法はない。身体をできるだけ縮めて、ただ当たらないようにと僥倖を祈りながらひたすらに下るだけである。

早くC3へ帰りたい。あそこへ帰り着けば、C2から上って来た交代の仲間たちが熱い飲物と夕食を用意して待っていてくれる。あそこだけがこの死の充満する空間で、生命が辛うじてへばりつくことを許された場所である。

暖かい食べ物と仲間たちのいたわり、一夜の休養があれば、また新たな活力がよみがえる。今日で五日間最前線のルート工作を担当した彼らは、明日からB・Cで休養することになっている。

彼らは戦い疲れてボロボロになった身体をようやくC3を設営した氷河上の台地まで運んで来た。すでに七時に近かった。だが、C3は見つからない。山は完全に夜の帳に包みこまれている。

「きっと雪で埋まってしまったんだ」

「呼んでみよう」

二人は声を合わせてテントのあるはずの方角へ向かってヤッホーをかけた。だが返って来るものは風雪の唸りだけである。風雪に消されて、声が届かないのだろうか。

「おかしいな、サポートが来ていれば、灯が見えるはずだが」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「通りすぎてしまったんだろうか」
「そんなはずはない。あの一枚岩の形におぼえがある。必ずこの近くにあるはずだ。落ち着いて探してみよう」
雪に埋もれたテントは、すぐ近くにいても見分けがつかない。
二人は、募る不安に耐えて、闇の中を模索した。ゴッグルに風雪がへばりつき、顔を叩く。アノラックのフードを精一杯にしぼって、這うようにして進む。
突然、前を進む津雲がなにかに足を取られて、雪の中に倒れた。
「あったぞ」
それはテントを支えるフレームの一角だった。テントは半分ほど雪に埋もれていた。
「おい、だれかいないか」
外から呼びかけたが、返答はない。テントは山体の一角に同化したかのように、無機的な静寂を保っていた。
「まさか」
津雲と高浜は顔を見合わせて、残りの言葉をのどの奥にのみ込んだ。
テント入口の雪をピッケルで叩き落としてテントの中に這い込むと、不安が的中したのを認めざるを得なかった。C3は朝出発したときのままになっていた。なにもかも凍りついている。後続隊のためにいちおうかたづけてはあるが、無人の凍結したテントが、一日のルート工作でよれよれになり、風雪のスコールで叩かれた身体を待っていたのである。今朝のトランシーバーによる定時交信では、山岡と増田のチームが上がって来ていることになっている。
後続隊どころか、C3とC2間においてはまったく荷上げが行なわれていない。今日一日、彼らは、補給の絶たれたルートの先で新たなルート工作に従事していたことになる。これは前進キャンプに必ず

サポートが詰めていなければならないという極地法登山の鉄則を無視するものであった。今日は行動を阻まれるほどの悪天候ではなかった。

最前線のキャンプを無人にしておくことは、テント崩壊のおそれがあるばかりでなく、各キャンプ間の連絡が断たれて、最高所のメンバーを孤立させ、危地に追い込むものだ。

「いったいB・Cでは何をやってやがんだ」

一瞬、荒涼たるテントの中で茫然とした津雲が、我に返ってつぶやいた。

「また、ローテーションをまちがえたんじゃないのか」

高浜が舌打ちする。トラブルはこれが初めてではない。

前進キャンプを次々に設営して頂上攻略を狙う極地法登山では、細密な行動表に基づいた隊員、シェルパ、高所ポーターのローテーションが必要である。ルート工作とその整備、上部キャンプの建設、下方からの補給を増強しつつ十分に荷上げしたところでさらにキャンプを前進させる。隊員の高度順化も考えなければならない。上へ進むにしたがい、ルート工作は難しくなり、補給線が伸びる。

前進キャンプはピラミッドの頂である。それを支える底辺にわずかなひずみが生じても、次々に上方に波及し、頂が支えられなくなる。前進キャンプの維持には高度に比例して、水も漏らさぬ全員の連係プレイが要求される。

だが、この遠征隊は「烏合の衆」と出発前からかげ口をきかれた混成部隊であった。隊員もあらゆる職業の人間が集まっていた。所属山岳会もまちまちである。

それに加えて隊長が登山全期間を通して休暇が取れず、B・Cから攻撃に取りかかったころ帰国してしまった。代って副隊長が指揮を取ったが、このころから混成部隊の弱点が露呈されてきたのだ。

命令系統がはっきりせず、隊員同士に意志の疎通が欠ける。隊員が平気で他の隊員の悪口を言う。隊員間の不和は、敏感にシェルパとポーターに反映して、彼らの不信をかってしまった。

最近のシェルパたちはヒマラヤの解禁以後、殺到する各国登山隊やトレッカーに付いてかなり悪達者になっている。弱体の登山隊はすぐに見抜いてしまう。また英語に強い隊員がいなかったことも、シェルパになめられる原因となった。

憤激した高浜がトランシーバーでB・Cを呼び出しても、いっこうに応答がない。

「ちくしょう、B・Cはおれたちを殺す気か」

「いまここで憤っていたところで、仕方がない。とりあえず、今夜どうするかだ」

津雲がなだめた。

「どうするって、もうとても動けねえよ」

この消耗しつくした身体で、風雪の荒れ狂う暗黒の岩稜を五〇〇メートル下のC2まで下りられるものではない。

「しかし、ここには食い物も燃料もない」

「非常食が少し残っている。なんとかそいつで、明日の朝までしのごう」

それ以外に方法はなかった。ようやく午後八時にB・Cと交信できた。定時連絡もよく守られていない。

「こちらC3、なぜサポートをしないのですか」

高浜は憤懣を一気に叩きつけた。

「C2〜C3間のルートが整備不十分で、まだ荷上げに使えなかったのです」

それはあたかも高浜たちのルート工作が悪いかのような口ぶりである。

「我々の食糧も燃料も十分ではない。いったいどうするつもりなのか」

「明日サポートを上げる。なんとか今夜一晩辛抱してください」

「なぜ今日サポートを上げてくれなかった」

整備されてないまでも、固定ザイルをベタ張りしたルートである。未知の登路を切り拓いた工作隊の苦労に比べれば、技術と体力において半分のちがいがある。

「山岡と増田が高度障害をおこしたので、B・Cへ下ろした。交代メンバーは、今日C2に入った。なんとか今夜一晩こらえてくれ」

こう言われては、もはやどうにもならない。これ以上話しても腹が立って身体の消耗を増すばかりであった。

高度障害の起きることは、当然予想されている。高度が上がるにつれて大気中の酸素が希薄となり、気圧が低下する。このため酸素不足による人体のさまざまな障害が現われるが、六、五〇〇メートル付近までは、B・Cとの間を荷上げ等で小きざみに往復することで克服できる。それを杜撰な行動表で、高度順化を怠っているから、キャンプ間の途絶などという基本的なエラーを犯してしまう。

「いまからこんな調子で頂上まで行けるのかな」

二人は、まだ頭上に立ちはだかる無数の障害をおもって暗然とした。

とにかくお茶だけはわかすことができた。熱い液体が腹に入って、ようやく人心地がつく。この高所では寝袋にくるまって寝ているだけで、身体は確実に衰弱していく。夜が更けるにつれて、風雪の咆哮はさらに募った。

「ひでえもんだな」

高浜が自嘲するようにつぶやいた。風雪が明日になってもおさまらなければ、交代が来ないおそれもある。しかしいまは明日のことをおもいわずらうより、今夜一晩、この冷凍庫の中のような高所で生きのびることが問題であった。

2

六月八日午前五時頂上攻撃キャンプに黎明の触手が忍び込んだ。夜を通して咆えつづけた烈風は、夜明けが近づくにつれてしだいにおさまり、日の出とともに完全に止んだ。風雪の死と交代して太陽が誕生した。七、六〇〇メートルの氷壁に危うく引っかかったエスパーステントを這い出た二人は、これからこの遠征隊の総決算である頂上攻撃に取りかかる前だというのに、打ちのめされた雑巾のようによれよれになっていた。

風雪に三日間閉じこめられて、ようやくつかんだ快晴の一日であった。今日を逃したら、機会は潰えるだろう。モンスーンが近づいていた。チャンスは一度しかない。この解体寸前の遠征隊で、頂上の射程距離まで近づけたのが、奇跡であった。

資材、食糧の補給も十分ではない。人の和は、雪が融けて岩のゆるんだ岩壁のように不安定であった。一個の落石で岩なだれ現象を誘発する危険きわまりない岩壁のような人間関係のピラミッドの上に築き上げられた最終キャンプであり、頂上攻撃隊員の人選であった。

一人百万の個人負担金を出して参加した隊員はすべて登頂者になりたがっている。津雲と高浜が選ばれたことに不満がなかったわけではない。ないどころか不満は大いにあった。だが、二人が技術、体力、履歴からいって最強の隊員であることは、自他ともに認めるところであった。

おれがおれがの寄せ集め隊であったが、どうせ失敗するだろうと見ている岳界を見かえしてやりたい意地があった。それだけが空中分解寸前の遠征隊の歯止めとなっていた。

栄養不足に加えて、酸素節約のためにキャンプ停滞中は、酸素を吸っていない。高度順応も六、五〇〇メートルが限界である。

ひどい不眠に悩まされ、寝返りを打つのも苦しく、上体をおこして夜をすごした。思考力は鈍り、茶をつくる元気もない。食欲はまったくなく、栄養剤をやっと茶で飲み下す。

B・Cのトランシーバーが呼びかけてきたが、それに応答するのも億劫なほどである。酸素マスクをかぶって、酸素を吸っているうちに少し頭がはっきりしてきた。

こちらの状況を伝えて頂上攻撃を告げる。

「成功を祈る。どうか気をつけて行ってください」

頼りにならないB・Cだったが、その声には真情がこもっていた。

現在高度は、七、五二〇メートル、ここから一気に七、九三六メートルの絶頂に攻撃をかけるのだ。最終キャンプの上部は、恐龍の背のような氷の尾根が白く輝くスカイラインとなって蒼の飽和した空間を切り抜いている。その尽きる所に絶頂がある。レースの飾りのようなヒマラヤ襞を数千メートルの奈落に垂直にたらした氷稜は、絶頂の処女性を守る最後の裳裾となって、立ちすくむ若者と、頂上台座の間を隔てていた。

それは、山が身にまとった最後の下着であると同時に、憧憬に身と心を熱くしてここまで慕い寄って来た若者を許容か拒絶かに振り分ける最も残酷で気まぐれな分岐点でもあった。

眼前には足元から垂直に切れ込む絶壁が、B・Cのあるネパルチュリ氷河へと深い奈落を抉り、そのかなたに二人が自らの足で一歩一歩築き上げてきた高度を証明するようにネパールヒマラヤの巨峰群が壮大な背比べをしている。

エヴェレスト、マカルー、ローツェのジャイアンツ、これにつづくアグリシャール、ピツエング、クルムバハ、ジャウフヒマール、ナパ、ナヒエチェバニ等の七千メートル級の巨峰がいま一日の最初の光を射ち込まれて、一斉に燃えあがろうとしていた。

それらの山々の中にはまだ光と影の間にあって青い透明体としてうずくまっているものもある。それ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com